

保育実習指導の在り方に関する一考察

鵜 川 陽 子

A study on the way of teaching childcare training

Yoko Ugawa

豊岡短期大学 論集

第 14 号 別 冊

平成 30 年 2 月 28 日 発 行

保育実習指導の在り方に関する一考察

A study on the way of teaching childcare training

鵜川 陽子

Yoko Ugawa

はじめに

本学における「保育実習」は保育士資格を取得するための必須科目である。保育士養成校に在籍する学生にとってこの保育実習は非常に大きな意味をもっているといえる。その意味とはまず一つ目に、学生たちは普段関わるできない子どもたちや利用者の方々と関わるができる場でありそれと同時に学内の授業では学ぶことが難しい“実際にかかわることでの学び”や“先輩保育者の保育を観察することでの学び”が経験できる貴重な学習の場である。二つ目には、これまでの学内での保育に関する理論や知識、保育技術を基礎として保育実習先で総合的に学ぶことで保育に対する理解につなげていくことができることである。そして保育実習を経験することで自らの将来像を具体的に思い描くことができ、就職までの期間に積極的に保育者となるための課題と向き合い少しでも保育技術が向上していくように勉学に励むことができるという重要な科目でもある。

保育士養成校に在籍する学生の入学のきっかけは、「子どもが好き」「出身園の先生にあこがれて」という理由で進学を決めてくることが多い。実際に本学における入学のきっかけを問う調査でもほぼ全員の学生が上記に挙げた理由で入学をしてきている実態がある。しかし保育の仕事は、「子どもが好き」という気持ちだけでは全うできる職務ではなく、環境構成などの壁面製作や保育室の構成、指導計画や指導案作成、掃除、保護者対応など子どもと関わる以外の多岐にわたる仕事内容がある。そして「保育における遊び」とは各年齢の発達段階を踏まえた上で、理論とそれを総合的に応用できる実践力が必要であり、ただ子どもが好きでふれあうという意味ではない。保育における遊びは、保育者が子どもの発達やそれまでの経験を踏まえて、成長を見通しながら目標をたて、保育活動の中で遊びを展開していくのである。よって保育者のかもしだす雰囲気はもちろんのこと、言動や行動、さらには子どもへの関わりにはすべてねらいと目的が存在しているのである。

本学は、2年制の保育士養成校である。保育実習を実施するための手続きは、学生が入学してすぐを開始しなければ養成校側が希望する時期に実習をすることは大変難しいという現状がある。そのため実習に向けての指導は入学後まもなく学生に対して指導することとなる。しかしその実態としては、実習受け入れのための初歩的な手続きの段階から「自信がない」「どうしていいかわからない」とい

う不安を訴える学生、さらには保育実習が近づくにつれて「体調不良を訴える学生」「行きたくない」とさらに強い不安を抱え、実習中断や中止という措置をとらざるを得ない学生も存在するのである。

本稿では、保育者を目指す学生が抱える実習に対する不安の要因を探るとともに、本学でおこなっている「保育実習指導Ⅰ」の指導内容とを照らし合わせその効果を考察するものとする。

方 法

1) 目的

保育者をめざす学生を対象に保育実習に臨む過程の実態の結果から保育実習指導Ⅰの指導内容や方法について考察し、学生一人ひとりに適した指導とはどのようなものなのかについて考える一助とする。

2) 本学における実習の時期

保育実習Ⅰ（保育所）：1年生時1月下旬から2週間（80時間以上）

保育実習Ⅰ（施設）：2年生時5月中旬から2週間（80時間以上）

保育実習Ⅱ・Ⅲ（保育所もしくは施設）：2年生時12月中旬から2週間（80時間以上）

※保育実習Ⅰは必修科目であり、保育実習Ⅱ・Ⅲについては選択必修科目

3) 調査内容と対象

保育実習Ⅰ（保育所）にむけて4月から3月までの期間を4期に区分し学生の様子と指導内容とを照らし合わせる。

調査対象は、2015・2016年度入学生：62名

<表1>

	主たる指導内容	学生の実態・様子
第1期 4月～6月	＊本実習先確保のための手続き ・保育者になるために （言葉遣い、身なり等の指導） ・実習に必要な書類の記入方法 ・電話対応の指導 ・保育所実習依頼のための訪問するための指導	・保育者とは“子どもとただ遊ぶだけ”という認識の学生がほぼ全員。 ・言葉遣いや身なりには気を付けなければと理解できているが、実際にはできない・自信がない学生：95%。 ・スマートフォンの保持率は、100%だが、目上の人と電話で話した経験のある学生は、10%未満。どのように電話で対応したらいいのか戸惑う学生：90%。 ・お願いのための訪問の仕方がわからない（知らない）学生：95%。

第2期 7月～9月	＊夏季休暇中の自主実習（ボランティア実習）の推奨指導 ・自主実習の依頼方法 ・実際に子どもと関わるために ・保育者の先生方から学ぶこと ＊夏季休暇中の自主実習中に活用できる保育教材の準備・製作 ・ペープサートの製作、演じ方の指導 ・手遊び、絵本の読み聞かせの方法 ＊自主実習の事後指導 ・自主実習で各自行った保育について振り返り指導	・本実習依頼のための電話対応の経験からそれを生かせる学生 90%、自信を持てず電話できない学生 10%。 ・保育教材製作には意欲はあるが実際にそれを演じる練習となると不安や苦手意識から体調不良を訴えたり、授業を欠席する者もいる。 ・絵本の読み聞かせや手遊びをさせてもらった学生は 20%。“ただ行っただけ”になった学生 80%。 ・実際に保育者の先生方の姿をみてケンカの仲裁時や給食時の対応の観察し「すごいと思った」「自分も将来あの関わりができるようになりたい」と感じた学生 90%。
第3期 10月～12月	＊本実習に向けて各種指導 ・保育実習日誌の記入の方法 ・オリエンテーションにむけて ・保育指導案について ・保育教材研究	・保育実習日誌の記録の記入、保育指導案の立案の仕方が理解できない学生 80%。 ・本実習に向けて保育教材の準備に取り掛かることができない学生 70%。 ・実習直前になるにつれて体調不良を訴える学生 20%。
第4期 1月～3月	＊本実習中の注意事項の確認 ＊本実習後の振り返り指導 ・実習報告書の記入について ・お礼状について ・各自の実習の振り返り指導	・実習開始後、「辛い、どうしていいかわからない」と訴える学生 5%。 ・実習を終えた学生たちは、それぞれの課題も感じながらも自分にも出来たという気持ちを実感として感じることができている者 85%。

結果及び考察

(1) 表1における第1期時の学生の不安要因

こども学科に入学し一番楽しみにしている授業科目に「保育実習」を挙げる学生が多い。その理由として“実際に子どもと関われるから”という理由が圧倒的なのである。しかし実際に授業が始まり学生が一番期待していたはずの実習への手続きとなる電話対応でつまづいてしまう学生が存在する。その背景を探ると、スマートフォンの利用の仕方が浮かび上がってくる。2000年以降を境に日本の携帯電話普及率が飛躍的に増加し今や一人一台保有していることが当たり前の時代となっている。携帯電話の本来の機能としては“相手と通話する電話”なのだが、スマートフォンの普及により電話機能よりインターネットを活用した無料アプリの通信機能で相手と連絡をとる手段の物へと変化している実態がある。目上の人と電話で話す経験のない学生が90%と示している背景として、学生たちの主たる連絡手段はメールであり、相手に自分の言葉で話すことで伝える経験がない学生が大多数ということである。しかもメールと一言で示してもその内容は、文章で伝えるということは少数派で今日では無料アプリ LINE のスタンプと呼ばれる表現方法で自分の気持ちを文章ではなくその時の状況にあったスタンプ一つで表現することに慣れてしまっている実態がある。よって、保育実習をするにあたりその手続きで突然電話対応をしなくてはならない状況となり戸惑い不安になる学生たちが多く存在するということが浮かび上がった。

このような学生たちに対して、実際に保育所に電話をかけた際に行われるであろうやり取りの状況をシナリオ集として学生に配布し、自主練習をすると共に学生同士でロールプレイを行い、最終段階として、担当教員とロールプレイで合格をもらった者から実際に電話をかけるという流れで指導を行っている。この指導方法から学生らは、電話という手段では、適切な言葉遣いで話をする必要があることを始めとして、何をどのように話をすればいいのかを理解できるようになり、想定外の状況になった時にはどのように対応したらいいのかを練習の段階で学ぶことにより、突然電話を切ることや無言状態に陥ることなく保育所に電話ができるようになる学生が増加していった。

また実際に保育所実習依頼するために保育所を訪問する際の方法についても訪問の際の身なりをはじめ応接室に通していただいてからの着席する位置など礼儀作法についても具体的に指導をすることで学生はマナーを学びそして身に付け、保育所に訪問をしている実態がある。

(2) 表2における第2期時の学生の不安要因

本学では、本実習に向け保育所の一日の生活リズムを知るという目的で夏季休暇中の自主実習を行うことを推奨している。これは強制ではなく、あくまでも学生がその目的を理解し自主的に行うことと位置付けている。自主実習時に学生が子どもと関わるための一助となるようにするための保育教材製作もこの時期に本格化するのであるが、製作は、得手不得手はあるもののほとんどの学生が意欲的に取り組むことができるのだが、実際にそれを保育者として子どもの前で演じる（活用する）ことができるようになる指導となると“人前で話すことが苦手だからしたくない”と逃げ腰となったり、演

じる順番になると極度の緊張状態となり過呼吸を発症する学生、さらには、体調不良という理由で授業そのものを欠席する者もある。このような学生らは、共通して“自分が評価される不安感”や“やらずにいい状況にさえなればやらずに終わることができる（逃げるができる）かもしれない感情”を持っていることが面談を通して明らかとなった。学生らは、製作をすることで精一杯で演技方の練習不足であったり、他の学生が出来ているのに自分だけでできなければ怒られるかもしれないと不安感を自ら高めることにより体調不良の状態を引き起こす結果となったりする場合もある。さらには、今演技しなければならないというこの状況から逃れたい一心のみの感情で授業を欠席し“欠席したからやらなくてもいい”と身勝手な理由で逃れようとする場合もある。

学生には、製作するだけでなく、子どもたちの前で演じることができるようにならなければ意味がないのかについて具体的に説明している。授業の一環だからもちろん評価はする、がしかし本来の目的は、実際に子どもの前に立った時に、その保育教材を演じる実習生から子どもたちは様々なことを思い描き、想像し、楽しむということを学生に伝え子どもたちが安心してその教材を活用した世界に入り込み短時間であっても“楽しい”“おもしろい”という経験ができるようにするためにそのテクニックを身につけることが保育者になる上でいかに重要なのかについて指導している。保育士養成校で学ぶべきこと一つひとつすべてが大切でどれか一つでもやらなくてもいいという学びはないことも学生に常日頃から伝えるようにしている。

（3）表1における第3期時の学生の不安要因

第3期は、本実習に向けて本格的な実習準備をする時期となる。保育実習を実施するにあたり記録を記入することは避けて通ることはできない。しかし学生の実態は、思いがあってもそれを言葉にすることが難しいと感じる学生が大多数なのである。記録ができないという問題と同じくして話すことができない学生も共通の問題として挙げられる。これは第1期時の電話の応対の不安を訴える学生にも顕著にみられることだが、学生指導をしていて学生からの言葉は、「わからん」「そんなつもりない」「だって仕方ない」「疲れた」など文章ではなく単語だけが返答となる割合が多いのである。そして少し教員から指導を受けると「あの先生は意地悪だ」「怖い」「厳しすぎる」等、どうして指導を受けたのか省みることよりも「あの先生とはもう話したくない」と関わることへの嫌悪感を示す態度に出てしまうのである。要するに学生自身の理解力の乏しさと学生自身も持っている語彙数が極端に少ない実態がある。筆者がこれを感じたのは、保育実習指導Ⅰの授業時にいくつかの場面を学生に提示しそれがどのような状況なのか具体的に詳しく説明することを求めた。その場面の一つに「子どもたちが集団で楽しそうに遊んでいる風景」があった。その場面では、「子どもがいる」「みんなで遊んでいる」「笑っている」と説明し、“具体的に・詳しく”ということが理解できていないような説明をした学生がほとんどであった。学生たちには再度「集団でどのような遊びをしているように見えますか」「みんなどのように笑っていますか」と具体的な説明となるようなヒントを与えてみたが、そのような段階を踏んでも単語でしか説明できない学生が多くいた。

語彙数そのものが獲得できていない学生たちに対して、保育の記録(実習日誌や保育指導案の立案)の指導をしても、記入の要領をつかむことができる学生は本当にわずかである。本学においては、漢字の勉強、保育に関する用語の説明、子どもの観察方法、など初歩の段階から指導を行っているが、ほとんどの学生が不安を抱えたまま本実習に臨んでいる実態がある。

この状況をなんとか打破していく一つの取り組みとして、入学してから卒業するまで絵日記の指導を授業の中に取り入れている。絵日記ノートはB5版サイズ、上部半分を絵を描く欄、下部半分は縦書き11行で文章を記入する欄となっている。第1回目は入学式をテーマにしている。絵日記の内容を検証すると、大多数の学生は、絵の貧弱さも顕著ながらその文章も筆者が驚くほど幼い内容であり、表現方法は多少の違いはあれ7割程度の学生は「入学式でした。緊張しました。ママと一緒に行きました。保育園の先生になるために頑張ります。」で終えている状況であった。学生の入学時点での文章を書く力がどの程度が知る手掛かりになると同時に、文章を書くためのルール(一マスを開けて文章を書き始める。主語と述語をつける。段落をつけて文章を構成する。句読点の付け方等)を身に付けていない状況が明らかとなった。学生が記入してきた文章を添削するだけでなく、返却時は必ず学生と面談する形式をとっている。学生が記入した文章を否定せず「〇〇さんは入学式、緊張したね。どんな雰囲気から緊張したと思ったの?」と問いかねずは、学生自身の気持ちを言葉で表現できることに主眼をおいている。すぐに返答ができない学生もいるが、「知らない人ばかりだったから」「すごく静かだったから」とただ「緊張した」という表現にだんだんと具体的な状況が加わった言葉としてでてくる。このやりとりを経てあなたのこの「緊張しました」という表現に対して「私は〇〇だったために緊張しました。」と表現した方が、よりあなたの伝えたかった気持ちが伝わる内容の文章となると教え、そのように今度は文字で書き直してみるように指導を行い、最終的には、最初の自ら書いた文章と推敲した文章とを比較しどちらがより相手に自分の伝えたかった内容の文章になっているか学生自身が実感できるようにしている。この絵日記を添削し学生とやり取りする中で、卒業までの2年間で驚くほど文章力が上がった学生もあり、実習日誌や指導案の立案のための指導と並行して日々学生の感じたことを文字として表現する練習を積み上げていくことは、なんらかの効果をもたらしていると考えられる。

(4) 表1における第4期時の学生の不安要因

本実習を間近に控える頃になると、実習に対しての不安が高くなる者も多くなる。しかしそれは入学してから保育者とはどのような職業なのかについて理解が深まることから生まれることであると考える。学生には、自分自身が身に付けなければならないことがまだ未熟であると実感できるからこそ不安な気持ちとして表出されるのだから、これまで学んだことを基礎として実習を通して実践させていただきなさいと背中を押す指導をしている。もちろん中には、「オリエンテーション時に実習時に演奏するピアノの楽譜をもらったが、練習が間に合っていない」「実習日誌の記録に自信がない」と具体的な不安を訴える学生もいるがこれは少数派であり、ほとんどの学生は、具体的な不安を

持っているということではなく、漠然とした不安を持っているように感じる。夏季休暇中に推奨している自主実習への参加時にも同じ現象が起きるのだが、「評価される自分」への恐怖感が大きい学生もいる。本来の目的である「実習生として子どもと関わる」ことよりも、「先輩保育士らにいつも見られている。できてないと思われているのが怖い」という理由で過呼吸などの身体症状を発症し、結果的に体調不良で実習初日が迎えられない状態となる学生も存在するのが現実である。

実習は、“できるから行くのではなく、できないからこそ実習させていただく。だからこそ謙虚な気持ちで自分ができることは一生懸命行い、教えていただいたことには素直に耳を傾け実行できるように努める姿勢がなにより大事である”と繰り返し学生には指導を行うが、結果的に実習を境に進路変更や退学となる者もいる。

一方で、不安を抱えながらも実習を無事に乗り越え、事後指導時での学生との面談では、「わからない場合には教えてくださいと質問したことで何をしたらいいのか優しく教えてくれたので、安心して実習ができました。」「絵本の読み聞かせをさせていただきたいのですが、時間をもらえますかと勇気を出して話したら、積極的だねと誉められたことが自信となった。」など現場の先生方の一言が学生の活力や自信につながり、不安感情から「私にもできる」という自信への感情に変化していくことも事後指導を通して感じていることの一つである。

おわりに

学生たちは、初めての实習に向け、保育者としての倫理観や資質、専門性がいかに重要かについて保育実習指導Ⅰの科目を受講するだけでなく、各種関連科目を受講する中で実感していく。そしてその中で、それらの力を身に付けようと前向きになるのではなく、「できない自分」「どうせやってもダメな自分」として蓄積していく学生も多く存在する。このような学生らは結果的に“絵本の読み聞かせや手遊びのレパートリーを増やすといった保育技術の習得”“記録（実習日誌や指導案の立案）の方法”などの学ぶ力が低下し理解不足や練習不足につながり実習直前にはそれらがすべて漠然とした不安感情に変化し精神的に落ち込んでいくという要因になっているということが現状だと考える。

さらに保育者は、対人関係の職業であり、これからを担っていく子どもを保育するという観点からも人としての礼儀作法を学生自身が身に付けているか否かについても重要な点であると考えられる。学生たちの多くは自分に自信がないために、対教員とのやり取りの中でも返事の仕方やその態度にも課題を持つ学生も存在する。学生たちには指導を受けた際に“自分自身がしてしまったことの何が不適切だったのか”“学生（人）としてどのような態度をとれるようになっていかなければいけないのか”を全教員が、日ごろの学生指導の際にも伝えるようにしている。本来は、学生が高等学校を卒業するまでの期間の中で、家庭やその他の生活経験の中で身に付けていくことができていたことが、できなくなっている社会環境になっていることを踏まえ、将来保育者（社会人）になる上において身に付けなければならないマナーについての指導も保育士養成校に課されるようになった時代なのだと感じる。

実習巡回指導において、園長先生方から「笑顔で明るい実習生が一番です」という意見をいただくことが多い。しかし“笑顔”“明るい”という二つの言葉は実習に臨む学生自身が「自分の持っている力を十分に発揮してみよう」という前向きな気持ちと「実際に〇〇を子どもの前で実践させていただこう」という具体的な目標がなければ結びつくことはないだろう。実習直前の授業で、学生自身が思いをもって実践したことが上手いかなかったり、失敗したとしても、それはあなたが成長するためのとてもいい経験なのだと指導をしている。先生方はその思いを聞いた上で、次に同じ場面になった時にあなたがどう行動したらいいのか必ず教えてくださる。だからこそ実習までに自分ができる準備は手を抜かず行うことが大事だと伝えている。実際、初めての実習で絵本の読み聞かせや手遊びやピアノの弾き歌いを実践し、保育者とうまくコミュニケーションを図ることができた学生たちは、その後の実習に向けて自分から課題を見つけ練習に励むようになる様子も見られるのである。

学生たちが入学後、保育の勉強をすることで自己肯定感が下がり精神的にも追いつめられるようになる現実を避けなければならない。時代の変化により保育者に求められるスキルは上がる一方で、それを将来の職業として選択してくる学生の資質は比例して上がっているとはいいいがたい現実がある。しかしそれを悲観するのではなく、一つひとつ丁寧に教授する必要性を改めて感じる。その一つは、学生自身が礼儀作法など社会性のスキルを身に付けることが必要であるという点である。“保育とは”を学生に論じる前に、毎日の生活全般にわたる教育的な指導も必要なのである。二つ目は、学生が保育現場をより具体的にイメージできるように授業内容を工夫すること。そして評価されることへの不安を軽減するために保育所などのボランティアに参加することで子どもや保育者との関わり経験が増え、構えることなく、子どもと保育者との関わりを目にすることで、子ども・保育者理解につながるのではないかと考える。この経験から自分が目指す保育者像も確立できそれが学生の自信を支えることになり精神的にもたくましくなるきっかけになるのではないだろうか。

実習指導をするにあたり、まずは一人ひとりの学生と向き合いその思いを知り、不安な気持ちを乗り越えらえるように支え、自信を持って保育職に就くことができるように指導方法のあり方を今後も探っていきたい。

参考文献

- 1) 全国保育士養成協議会「保育実習指導のミニマムスタンダード」 北大路書房 2007
- 2) 中山忠政・上田慎二「効果的な保育実習指導に関する研究-事前指導における部分保育案作成の試み-」 プール学院大学研究紀要 第54号 pp275～284 2013
- 3) 開仁志「保育実習の指導の在り方に関する一考察-実習現場における指導の実態を中心に-」 富山国際大学子ども育成学部紀要 第1巻 pp110～pp117 2010
- 4) 岡本弘子「実習に対する保育専攻学生の意識についての一考察」 静岡英和学院大学静岡英和学院短期大学部紀要 10 pp71～pp81 2012
- 5) 汐見稔幸・大豆生田啓友「最新保育講座②保育者論」 ミネルヴァ書房 2016